

野附誠夫先生を悼む

弔 詞

野附誠夫先生は3月12日午後5時47分享年86歳で、安らかに永眠されました。先生のあの温たかいお姿にもはやお眼にかかることができなくなり、深い悲しみの念に耐え難い思いで居ります。

先生は明治32年10月17日山形県下にお生まれになり、早稲田中学を経て第一高等学校で学ばれました。大正14年3月東京帝国大学理学部天文学科を御卒業になり、同年4月に東京天文台技手として三鷹に着任され、その後昭和35年3月東京大学を定年退官されるまで35年の長きにわたり、我が国の太陽物理学の観測や研究の強固な基礎をはぐくまれてきました。この間昭和27年には東京大学教授に補せられ、昭和19年から24年間日本天文学会評議員を、昭和32年から2年間を同会理事長を務められ、日本の天文学の発展のために大きな貢献をされました。また昭和30年には、東京大学生産技術研究所の観測ロケットの専門委員会委員長となられ、飛翔体による天文観測の先駆的な役割を果たされました。更に太陽観測を通して国際協力の重要性をいち早く認識され、実行もされました。

先生は第二次大戦中に日食外のコロナを観測するコロナグラフの計画を進められていました。しかし戦争の激化により一時中断されましたが、戦後間もなく、昭和21年には口径16cm 焦点距離145cmのコロナグラフを木製で試作されました。昭和22年、23年、24年と八ヶ岳や乗鞍岳にて実験観測を行い、24年には現在地の乗鞍山塊摩利支天岳山頂にコロナ観測所を創設されました。ここは日本アルプスの中では比較的気象条件に恵まれているというものの、海拔3000mという厳しい環境下に在り、かてて加えて当時の世の中は敗戦後間もない物質欠乏の悪条件の中でしたので、新しい観測所の設立には、東京天文台、東京大学、文部省、大蔵省等の関係者の熱意と努力や、長野県、岐阜県の地元の方々のお暖かい同情と協力に負うところが大きいのは言うまでもありませんが、このような多くの人々の援助が得られたのも先生の御人徳によるものでした。

先生は齡50歳を過ぎておられたにも拘らず厳冬の乗鞍山頂の小さな観測室にて、若い者と寝食を共にし、所員からはオヤジと言われて親しまれていました。テレビが放映され始めた頃、御自分で受像器を組立てられ、当時は大変めづらしいテレビを見に、多くの人が先生のお宅に集まり、酒を飲み交わしたと聞いて居ります。



巧言令色鮮矣すくをしじん仁といわれています。将に先生はよい事とは言われぬ方でしたが、独りてに多くの方々と心の交わりが生じられ、親しまれ、信頼されてきました。長野県、岐阜県の地元に行きますと、土地の方々に野附先生はお元気ですかと必ず尋ねられます。乗鞍のコロナ観測所は、今もって先生の暖かい御庇護のお蔭で、円滑な運営が行われています。東京天文台で最初の構外施設であるコロナ観測所の建設・運営が上首尾であったことは、その後の岡山天体物理観測所、堂平観測所、野辺山太陽電波観測所、木曾観測所、野辺山宇宙電波観測所などの施設を構外につぎつぎにつくり、今日の天文台発展の第一歩をふみ出すきっかけとなったと申せましょう。

先生は、自然とも、また人とも、ふれ合いを大切にされました。一つの仕事を追求する上に、国内・国外を問わず多くの人々の協力がいかに必要であるかを身をもってお教え下さいました。今後日本の天文学が歩まねばならない巨大科学への道を着実に進み、天文学の発展に向けて、先生が蒔かれた種を大切に育てて大きな実りとなるよう、私共はなお一層の努力をしまります。

先生とのお別れに際し、日本天文学会を代表し、謹んで御冥福をお祈りいたします。

昭和61年3月15日

日本天文学会理事長

早川幸男

野附誠夫先生の御急逝を悼んで

野附先生の突然の訃報に全く驚いてしまった。先生は昔から非常に御壮健で病気などされたことは殆んど無く、頑健そのものといった御身体であっただけに驚きも特にひどかったのである。

私は昭和24年の12月の末から翌25年1月はじめまでのコロナ観測所での勤務から先生の御手伝いをはじめた。私が天文台に入台したのは昭和25年の4月1日であって、この乗鞍勤務の時はまだ鉄道技術研究所の職員であったのである。この辺からも野附先生一流の仕事の進め方がうかがえる。

先生はいつも静かで、怒った様な御様子は一度も見ない事がない。勿論部下をきつく叱る様なことは一度もなかった。

三鷹で同じ部屋に居たある日、ある御客様がつかつかと、この部屋に入ってこられ、そばに居た私がすぐ席を外さざるを得ない様な強い語調で先生を非難されはじめた。そのあとで先生に御目にかかったが、先生は常と全く変わらず、どこかで風でも吹きましたかといった御様子。

先生の一番の御苦勞はコロナグラフの何回かの試作とその試験観測、更に最終的に観測所の設置場所の決定で

あったであろうと想像している。「俺はこんな苦勞をしたよ」といった気負った御様子は全くなかった。又先生の方からこの事について私に話されたことは一度もなかった。

ここで一つだけ先生に叱られたことを思い出した。御恥かしい話であるが何かのことで少々頭にきて、翌日にうっかり先生に「昨夜はよく眠れませんでしたよ」と御話したら、先生は呆れた様な顔で「その位のことで眠れない様では、とても観測所はやってゆけませんよ」

先生と私とではどちらか一人が三鷹に残る必要があり、三鷹では忙がし過ぎてゆっくり御話は出来なかった。はじめの頃一度だけ山の上で御一緒したことがあった。その夜に何かのはずみで「君達もゲーテの作品位はよんだ方がよいよ」と言われて驚いたことがあった。

昨年暮に先生の御宅に参上した折に、ふとこのことを思い出してか、先生とゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」についての話がはずんでしまった。あとで先生から一枚のおはがきを頂いた。それに「ミニヨンの話は楽しかったね」とあった。

今年も春になったら、また…… と思っていたところに突然の悲しい知らせ。

心から先生の御冥福を祈ります。

(長沢進午)

野附誠夫先生のありし日を偲んで

わが国における日食時外の太陽コロナの観測研究は、野附誠夫先生によって始められた。

昭和14年戦争のため計画は中断、戦後の昭和21年より光学系の研究と、手作りのコロナグラフによって試験観測が進められ、昭和23年8月12・13日に日本で始めて日食時外に太陽コロナ輝線(5303 Å・6374 Å)が乗鞍岳で観測され、翌昭和24年現在地に15坪のコロナ観測所が建設された。先生が50歳の時である。

戦後の食するものは勿論、総てに乏しい時代であって、苦難な試験観測を行い、日夜各方面に予算獲得のための折衝をされた結果急成長を遂げたが、それには先生の太陽の観測研究にかける熱意と、優しく静かで礼節を重んじられ、接する人を自然と動かしてしまうかざらないお人柄によるものであった。

先生はコーヒーとお酒が大変お好きであられたが、決して生活の楽な時代ではなかったのに大勢してよく御馳走になったもので、「ドウカ・ドウカ」とすすめられる言葉には退くことの出来ない魔力が秘められていた。

人の一生において、必ず一度は人と人との大きな出合があると云われる。そうだとすれば、私にとっての野附

先生は、敗戦・復員そして心のやり場のない疲弊きつた時期に起きた大きな出合であり、先生のお人柄にうたれて“何うせ一度は戦で棄てた命であり、青山の如きこの先生ならば余った命を預けてもよい”と慕って仕え、何歳になっても御注意の頂ける有難い恩師であった。

あるとき先生は、「私は子供の頃にハレー彗星を見ましたが、今度来るときまで生きて見られるとよいですがね」と、彗星が話題となり出した頃おっしゃったことを思い出して、天文台で頂いた写真をお届けしたところ大変喜んでいただいた。二度目は手紙を添えてお送りしたところ早速お礼の電話が入り、花見のお約束をして楽しみにして居られたのに、その翌々日には突如として逝去されたとの知らせであった。そういえばいつもと違ってなかなか電話を切ろうとされなかったなと思い返され、あれがお別れのご挨拶だったのかと愕然とした。

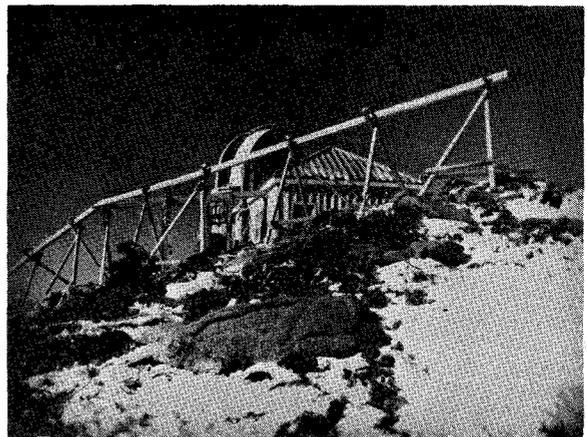
お通夜は雨から雪に変わり、この時期の東京としては珍らしく銀世界となった。多くの方々“先生を迎えにきた雪だ”“この雪に乗って乗鞍に帰られた”とそれぞれに感慨深げであったが、いま乗鞍高原に立って独り白銀の乗鞍岳を眺めるとき、自然と胸を締め目頭の熱くなるものを禁じ得ない。 合掌

(森下博三(かもしか仙人))

野附誠夫先生 略歴

明治32年10月17日 山形県最上郡真室川町に生れる
 大正6年3月 私立早稲田中学校卒
 " 10年3月31日 第一高等学校卒
 " 14年3月31日 東京帝国大学理学部天文学科卒
 " 14年4月11日 東京天文台技手
 昭和6年6月6日 " 技師
 " 7年 国際天文学連合第4回総会出席
 " 16年12月15日 天文学研究委員会委員
 " 18年4月17日 学術研究会議会員
 " 19年~43年 日本天文学会評議員
 " 24年12月1日 理学博士

昭和26年3月2日 電波科学研究連絡委員会委員
 " 26年3月2日 電離層研究連絡委員会委員
 " 27年5月1日 学術奨励審議会委員
 " 27年6月25日 第3回極年研究連絡委員会委員
 " 27年7月1日 東京大学教授
 " 30年12月1日 観測ロケット研究連絡委員会委員
 " 32年~34年 日本天文学会理事長
 " 35年3月31日 東京大学停年退職
 " 35年~55年 東京理科大学教授
 " 42年~44年 " 理学部第二部学部長
 " 61年3月12日 死去 享年 86歳

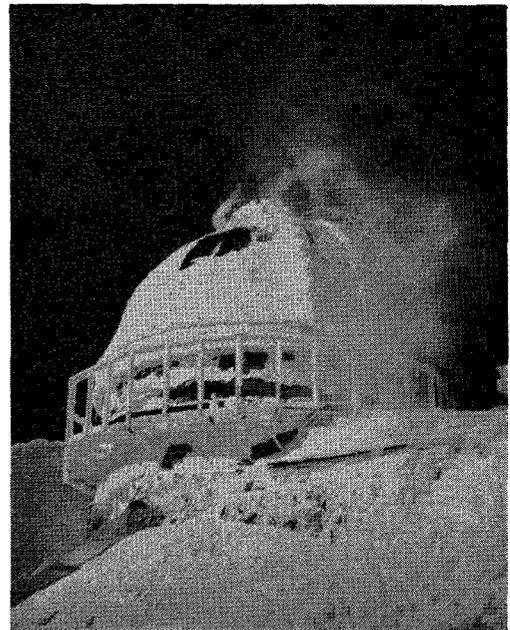


▲昭和24年10月 乗鞍コロナ観測所(15坪)と無線アンテナ(箱入)

◀昭和24年10月 試作コロナグラフ第5号機(第1次越年観測)



▲昭和24年11月 左から、山本康郎、森下博三、野附誠夫、清水一郎、河野節夫



▲昭和24年11月 10cm コロナグラフドーム